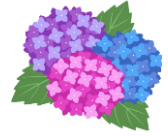




富士見市立東中学校

6月号

こ ち
東中だより 東風



『夢や希望をはぐくみ、一人一人が輝く学校』を目指して

巻頭言

校長 菅野 誠一

何事も「酸（す）い酸（す）い」

入梅の頃、店先に出回る青梅を見かけると、『桃栗三年柿八年、梅は酸（す）い酸（す）い十三年』の言葉が思い出されます。丸い梅の実が、桃・栗・柿を代表して、その言葉の深意を丸ごと教えてくれる気がします。「どんな試験問題もすいすい解ける実力がつくまでには時間がかかります。」と、梅干に身を変えて、口を酸っぱくして生徒達に伝えてくれるかのようです。「この時期、桃・栗・柿等の旬の青果は、店頭はまだ出ません。練習の成果もすぐ出ません。カリカリせず、地道に活動を続けることです。」と、カリカリ梅に身を変えて、部活に励む生徒達を励ましてくれるかのようです。

しとしと降る雨に濡れて咲く可憐な紫陽花と同様、カタツムリも梅雨の風物詩です。コロナの苦惱で渦巻いた世の中を物語るような渦巻き状の殻に、ぐるぐると目が回るほどのコロナ対応に追われている人間の目玉を連想していると、「♪つのだせ やりだせ めだまだせ♪」と、歌が聞こえてきます。角も槍も目玉も出さず、殻の中にこもっているカタツムリの様子に『ステイホーム』の言葉を連ねると、殻の中からカタツムリの声がしてきそうです。「この中は『密』にはなりません。自分だけの場所ですから…。」カタツムリは、漢字で『蝸牛』と書きます。マスク越しに凝視しているせいでしょうか、この二文字が『禍牛』と瞳に映ってなりません。“コロナ禍の牛（うし）年”の略語のごとく…。「角も槍も、コロナに全く歯が立ちません。」と嘆くカタツムリの遅い動きが、コロナ禍の悪路を“牛の歩み”で進む人類を形容しているように思えてもきます。

「しめしめ、コロナが退散したぞ！」とは未だに言えない、じめじめした梅雨時です。

紫陽花の葉の上をよく見ると、青蛙が静かに乗っています。葉の色と見分けのつかない青蛙の体色に『青蛙 おのれもペンキぬりたてか』（芥川龍之介）の句が重なります。

「♪はっばじゃないよ かえるだよ♪」と、絵描き歌を歌い出した青蛙が「将来、かわいいコックさんになるんだ。」と夢を語ります。「♪6月6日に 雨さあさあ ふってきて♪」という歌詞に合わせて、コックさんの腕の絵をひときわたく濃く描きながら考えます。今こそ、人類は、新型コロナウイルスという難敵を“料理”する腕の見せ所であると…。